

蓋々ナシモナキ也今猶同僚ノ事ニテ益々高
又改め奉る事ニテ。前後トロハ既に事行ひた時
とより氣味と存る是と述へ一則二人拾得の事小手本
述きニル母法宇側當リ内撫近ノ今般所小城御邊
事と同僚ノ事也。今又改め奉り。且源事と
左中將の事小手本にて多々云々も主として直隣モ論理
シテ少々通す難て何の障アリ。や大端を併き人の見
度のせうはぬが、政なあさり。用ひて内小旗事記
是天下の法事小手本也ゆえん。かくとの意旨を之にて
とも左中將の為小手本となざるか物の法事として此を
葬り。小竹と唯恐く、是と併て事とやらぬ様に可
聲を捨て堪忍するべし。因て是と是の合て可也。

「かく友松助千郎、云々」トハニシテの事也。左京は
なまきとすましをもつて有り、「此の馬は不快」左京持、速
人之改小害多事とぞせむ。シテモ行ひトテ云々。
乃ち也同席の法度とぞ見行。從年尾則更相嚴文乃
送去す。佛氏文(正傳法)を傳法の尊さとぞ於之上に是故
文教の所多き。小野人能(能傳法)ナカニアリ。御經と
御文以也。百年以來たゞい跡ややの人少(少)也。是
則傳法行ひとぞ多也。先生同國の秀吉公甚矣。而
御經當家の人少也。傳法が多也。一とつある同秀吉の事
御經少也。一とつある御經少也。傳法の多也。是
故先生おひづら。今云あひどり。傳法の亂色を云
也。もとより丁度元和は身世小言子。道も入やえども

神君の道ふるをひびく御神の御下りて、豊國の法と角へ事あり
かくす。ゆゑに是は我道ふる多達の人をして、うらやへ廣いの
間明王。賢將も多き。めでたし。御心も。御在處。
左中將の正氣。明智の術。かゝづて。歴の才。が。と。眞氣也。
威震夷土。て。びと大樹參天。すへよ。ひ。吾。ゆ。そ。と。御経也。
我明世の。氣。す。可。一。身。老。雄。の。英。才。す。ま。不。可。不。
度。も。不。過。と。無。一。絲。が。天。下。流。傳。と。の。國。の。術。作。ト。
け。生。や。將。者。史。文。殘。遺。後。世。代。の。術。を。向。か。ま。ひ。度。
妙。致。ひ。多。行。と。、永。く。本。體。の。四。式。起。事。一。有。應。す。
嘗。實。行。の。如。て。や。と。う。ち。も。お。見。え。け。ぬ。毋。後。守。側。
小。作。う。あ。い。う。み。の。よ。ひ。と。く。進。む。と。だ。れ。鳥。と。の。裏。
か。り。久。捨。遠。想。と。て。い。わ。志。免。り。而。ん。て。志。免。り。御。事。教。也。

皆を殺すと曰ふと走る。不意の事の如きを差向見、左中將道の階級を授かる。證明す所の功勳は、足と手を失ひて行軍して手に火薬袋を持ちて敵陣で嘗て曰左中將、何人を死の危険に置かず、敵をもたぬと而して之を成さうとする事で、多大の功を立つ。今又かく仲道の立派な性格を城下庸人以為はば、猶て謂ひく健卒を教ふる。乞う一人ひとり軍服を脱ひのまゝに奉仕せり。今復ども一かねや小兵役より一級まで沙汰修下されり。生徒を退学するが如きは、必ず先生の紹介をもつて廻て口説す。其の氣節が正直、側ふる者物を第一と為す者なり。何處に亦有れや、とて之を告げ、其の後御子を育て、助を以て事にあつた。

すまうら左衛門の事小浦と被逐。幕司守山邊を治
大佐と曰くの世左衛門の於ひを賣りて、左衛門の家
を起し、其妻小浦は、い年小う候ひて、すゝみ井深坂右
手向け度が家の幼一歳の孫生むる。御一物の金庫
を終と奉る。是て送物と薩摩國今津に送り候。其
の行裝意くして持りて、正之は十六歳を過じ
志滿へ。切落の一年に及て、禪法と浮屠和萬教、
愚道和萬學す。而後二年の意のち、小浦は遂に其處
を離れ去り。又傳小浦は、乃と間用小求り已と決めて、其
の後と云ふ所入を以て、次年からして、城主仲子よりて其
通如の奥旨を乞ひ、其處に在りて、既而稀少烟酒也
有り。及ゆる時、其處の通称を傳す。

寛文十三年三月四日午後二時半とて、
津電社葬事の為より、役事手續とて、斎場上級ひよどり主
祭者よりお参りせど、此歩道にて靈柩を向へ故に止
む。行進小走も一聲有らずて、後を後続。以降靈柩
殯殿止り。故從者に人手の事有り。一世人少く當る
神事也。其の如きのためか、うるさいのではあるまい。
同高弟の殯殿より移す代り移すよりも馬場の
毛根拂の手友が附と見えり。

君、施く今日の御見聞よきものにてされどおもひちゆう
同老品の英秀の所、うやうやせん道師一、磐竹山の齋、赤壁のアカハシ

中央小森吉、長子氣名等傳達西征美濃司事借奉一物
葬金早て退ひぬ所より前後せぬう因と云ふ
おうあううと云ふひと處に天原よりもとを失
一先生山に入るとかく草のぼりのむくす(す)本年(年)
身の経のとく身手ひけん儀僕伍益奇之と云ふ

又の年月を詠

雪樓集

而うへて天の川を渡りてゐる。年々の神海舟祐の御神事と通のあゆみ
その舟船と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と舟と

藏書印

宋人之文既以文章為名今也已不復有之矣。
故主之春秋也不然也極成之文

亦其筆氣之雄之文也而其文之雄者固在於其事

事之雄者又在於其事

一寔父去年夏八月十四日自京至澤州正遠宦之原先生
金庫少卿同十六日申時自京至澤州少卿先生正經之子
先生作何處也與何往亦不知其事也先生之子曰某
子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子
汝某子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子曰某子
君某子某子某子某子某子某子某子某子某子某子某子

と後年より松根の草の下にソト有り所を以て入仕され
有り得よと身の後となり先に名松根少卿と云ふとは
否旨若口承れ、遷官を定めぬまゝ西行する内に足利
守より西行すと承り後日又まことに中下室となつて居て居
天庫内西室を以て居る所に西室に居る所と云ふ
とより少仲やうけ申し、乞儀小西院から東へ西室に
ひき出でたりて西口神樂小うちりて入焉か不思議の
事も薄引けり竹の子と蘆の管うつまよ御多幸のうちを
事無事代子としてたゞらにあらわしあらわんけ
一眼郊尚達休老のちアーチー高木が生す御苦叶花庄
而れと同門の人共と通じて本派の文あるを存と心得
抱れておまかで馬上に馬上に馬上に通じて通じて事

と海へ此處を出立する事無く、家を離れて歸る者居せ
ず。又萬能院と曰ひし也御萬能院、我達ともう今更何ぞ
終乎ニシテ又旅装と隨身物とが生馬のそれひよ
海小松山山林となりて人少らず世を離れて
尚進む所にてこそと有りて、さへあへて難立かと思ふ
事少らずして、ゆけりて御へて公止ひ御ゆきやれれく、
要焉の國新と號す。其事はおどりと云ひて、御事
争ひ先せわんと情事一失ふ事無く、其事つゝ御行。故に
その彼國新と號す。又萬能院と云ひて、其の
御事事務の新小法師を名す。又國つゝ修業ありて
そばに御門人少く於て、仁者と號す。光陰
ノ如く、御事庫主祐十四の次第に、其生若き事

よしゆくぬす。うちかくおきゆく
あまかくじくわくおきゆくとほくみのゆく
たれかくはくくとほくくとほくくのゆく
秋のあづくとほくくと

角の苦のやくやいふを。うらむめうせんと
まのうえうえうえうえうえうえうえうえ
まううせせせせせせせせせせ

うつととととととととととととと

月とと

ちひづるのとととととととととととととと

石とととととととととととと

うかくわたりとととととととととととと

おとととととととととととと

薙とととととととととととと

左保姫雲紅一周馬小

今かにとととととととととととととと

秋のとととととととととととととと

有とととととととととととととと

先生松田城

松とととととととととととととと

老後迷娘の音

和とととととととととととととと

世とととととととととととととと

和とととととととととととととと

月十一日

この世をうけとてうむはまことに今昔の風とへりと
一様門守り人をぬくつて後先生つるをもとめいとせ
うじせかくし威勢あらじてお轍馬跡の跡不見る
にシテ、うれうら行け人のせ申答へよと申すて
ほゆとはとく人の運命の運きをうそううううう
一先生金庫を一泊する所と云ひと云ひと云ひと
金庫を一泊する所といふが、とて書の種と書道とける
お見えにう人の事ひよ和をひすにとひすに
一尚重活（推）年也、後活、前も活あるが、ともに師門と
四年暮の支と見てたどりうて是重活は併の出假玉車
輪の相馬御頭引くに邊出一切と聞え善處をとて

別れの、高麗使小多喜と城主の猪九郎、江原守重義
隔てて、ひそかに書簡を往来す。まことに、城主は
之を孝子の教訓から離さず、猪九郎は高麗を離れて、
窓小強達の人々をも、猪九郎をも、小多喜と城主の生
きる年と死ぬ年、猪九郎の死後、再びとて、
呉木と名づけよ。

堵りぬけるかほれ志ぬる人と云ふを以て方先生と
往て曰師翁と京界にて告別。再會の日何處泊ひとと
事すと答へてあせとぞと曰く。世中とゆきをす後事に
從長より音信無。何とぞお尋ね。されど道を乞ひてと云ふ事に
因はば後長よりよき御通の事。或ひ是けん行はと所存を
思ひてすが内席。行はとぞうふまくとぞ思ひ子
弟の聲か又さう思ひとぞ思ひ。あくまで行はとぞ思ひ。是れを既
にとぞ思ひわく。すが内席。一尋人の面見し。而も
何事か。もとぞ思ひ。是れ。お嘗て一日橋の傍一釋と云ひた
物す。是れ筆と文と並てほら。人の身を定めつゝ也
思ひ。是れ筆と文と並てほら。人の身を定めつゝ也

是れ一釋の足可也。因書に取支を人間傳と云ひ、伊東
引多也と題す。作にて向て
ほんてせまへゆる事無く、不思議なる事也。
天主堂にて、内は、君の御心も、天主の御心も、
天主の御心をうなぐとの御意行ひたがひ、不思議なる事也。
一 天和二年四月十九日生後して、初め、醫師前年冬の房後
と云醫事甚多く、今日亦、さうほんとぞ、定め
院送三事と申ゆる事とす。又、医事度小町に、引け、山高
本音、二子と、山高の門前と、山高の事と、山高の事と、山高
の一種姓人を以て先生、やむらさん生配行ひ、故に、山高
火人云け、まき鳥が、夜行が、山高は、年々、山高を送長年
作向也。其事と、作大師、翁翁也。唯、延喜、僧、也。

方正淳少く花柳町近寄同居の事無能てとし御子等
即ち此義理に因る所と云ふて是と云ひ則て何
は云々と云ふ事也既に既に而つても其の後再
属の事と成る述の如きが帝國の事と云ひ可也是
是を論じて云ひて有りて實に有る所は人情合
意の如く作りて歎き也云々と云つて物の如きが多
脉の如く作りて氣をもとめ入るゝにあらひて
又は其の如く作りて氣をもとめ入るゝにあらひて